

羞恥心よりも、心や体の痛みよりも、その意志は自分の中で優先される。

彼が自分の中で果てて、快楽を感じたと実感できるのは喜びにつながった。そこに恋愛感情がないと知っていても、ただの性欲のはけ口だとしても、彼の体温を確認できればそれで満足した気分になれる。

臨也が自分に手を出すのは、きっと恋人ごっこにはセックスが必須、と彼の中で義務めいた決まりでもあるのだらう。

だから、彼は帝人を抱く。何度でも。彼がその関係に飽きるまでは。

もつとも、帝人が知らないだけで臨也にはほかにも恋人がいるのかもしれない。それくらいの器用さや体力があっても彼ならば不思議ではなかった。

「よお」

「こんにちは」

歩いているうちに、静雄の姿を見つけた。彼も帝人に気づいたらしく、右手を挙げ、挨拶してくる。ぺこり、と帝人も頭を下げた。

「そろそろ別れたか？」

「いえ、一応まだ続いています」

主語はないが、無論意味は明白だ。彼にとって、臨也の名は口にしたいくらいに厭わしいものらしい。

池袋の街を歩いていけば、それなりに静雄と遭遇することはある。

それまでは見かけても静雄が気づかなかったり、挨拶するには距離がありすぎたりしたが、最近は見かければ帝人から近づいたり、逆に静雄から帝人の元にやってきてちよつとした会話をするようになった。

帝人にとって静雄は非日常の代名詞でもあるので、彼と少しだけ親しく慣れたことは単純にかなり嬉しい。臨也との恋人ごっこは思わぬところで歓迎すべき変化をもたらしていた。

「早く別れる。別れたら記念に旨いケーキ奢ってやる」

言われて、思わず笑った。

「それ、お祝いってことですよね？」

「当たり前だろ。あんなノミ蟲と別れたら祝うに決まってる」

真顔で告げられ、さらに笑った。

「その時にはお知らせします。……そんなに先の話じゃないと思いますし」

何しろ、もう三週間だ。予想ではもつと早くに飽きると思っていたが、存外長続きしている。けれど、あと一週間もすれば一ヶ月。そろそろ限界だろう。

「お前……」

静雄は何か言いかけたが、結局その後言葉を紡がなかった。

「心配してくれて、本当にありがとうございます」
何度か告げている言葉を改めて紡ぐ。

「……」